



黒板が置いてある方が 「前」だと思う？

私は *NO* だと思う。

学校にあふれている「当たり前」を問う。たとえば、「前を向いて」といわれて向くのは、どこでしょう？教師がいて、黒板を背に立つ場所を思い浮かべるのは、歴史のなかでつくられた意識と態度です。長期的な歴史の視点からあえていえば、その「前」はわずか150年程度の定番です。明治時代に一斉に教え、学ぶ場としての教室が整い、みんなが一斉に向く「前」が定着しました。それ以前は教師がいるところが「前」であることは自明ではありませんでしたし、これから150年はどうでしょう。教室に新しい「前」をつくるのは、現在の教育を捉え直す試みかもしれません。

梶井 一暁 KAJII KAZUAKI	専門	教育学 教育史		
	研究キーワード 教育史 人間形成文化史 教員養成論			
教育学域 教授	授業内容 日本教育史特論、日本教育史特論演習、教育科学の理念と今日的課題、教育組織特論、課題研究など	主要研究課題 近世教育史、近世・近代移行期の教育状況、教育をめぐる日本と西洋の交流史、教育と宗教の人間形成史、学校や教室の成立、地域教育史など	もっと知るには 	
大学院：教育科学専攻(修士課程) 担当				
学 位 博士(教育学)				

梶井の教育学

01 歴史の観点から教育を考える



過去をまなざし、教育を長期的視点から考えるのが教育史です。変化や連続の過程を考察します。なぜ過去か？現在は過去の蓄積のうえに成立しています。過去を探り、現在の問題の起点や可能性の手がかりを考えるのが、歴史の視点です。今を直接の対象としない歴史研究は、遠回りの方法でしょうか。

05 過去百年有効だった考え方から学ぶ



歴史の教訓に学ぶ、ということがあります。過去は成功も過ちも含みます。過去から未来を予想することは簡単ではありませんが、過去長く有効だったことはそれなりの理由があるはずで。単純な繰り返しではなく修正や洗練を加えながら継続してきたことは、次も有効である可能性は高いです。「学校」という仕組みもそのひとつではないでしょうか。

02 コンビニくらい寺子屋があった時代



江戸時代は「文字社会」が発達し、広い階層の人々の読み書き能力が考察されています。その識字を支えたのが寺子屋です。4～5万軒の寺子屋があったと推計されており、現在のコンビニに近い数です。身近に読み書きを学ぶ場があったといえます。時代劇でもお店や看板に文字が見え、文字が読める人々の社会であったことがわかります。

06 京都の資料館などで本物に触れる



ゼミで京都の資料館に行きました。史料(歴史資料)に触れるためです。資料館は「本物」に出会える場です。岡山でも西大寺文化資料館や八角園舎(旧旭東幼稚園舎)を訪問させてもらっています。本物は迫力があり、その汚れや傷も過去を語る一端です。そして、史料を今に伝える人に会えるのも魅力です。

03 学校に行くのって当たり前？



義務教育だから学校に行かなければならない。「義務」は誰の義務でしょう。子供？保護者？国・自治体？「義務」の意味は歴史のなかで変化しています。義務教育はcompulsory educationの訳語です。どのような経緯でこの訳語が定着したのでしょうか。福祉論者は違う訳を考えていたようです。学校をめぐる当たり前を問うところに、教育「学」の入口があります。

歴史
研究



教育



好奇心

07 中国の大学と共同研究



留学生が帰国し、中国の大学で研究者になっています。元ゼミ生と共同研究を進めています。日中教育を交流や比較の視点から考察し、意見交換したり、論文を発表したりしています。学術を通じ岡山を訪問してくれたこともあります。學術を通じた文化交流の機会でもあります。元ゼミ生は日本語を話してくれるので、助けられています。頼もしい存在です。

04 よりも大切なこと 歴史が得意！



歴史が得意でも不得意でも「関心」があることは、歴史研究の窓口です。覚える歴史から考える歴史に飛躍してみましょう。歴史を考えるヒントは、教科書だけでなく、映画、ドラマ、アニメ、ゲーム、マンガ、小説など、さまざまな媒体にみつけることができます。あなたのアンテナは何を捉えるでしょう？

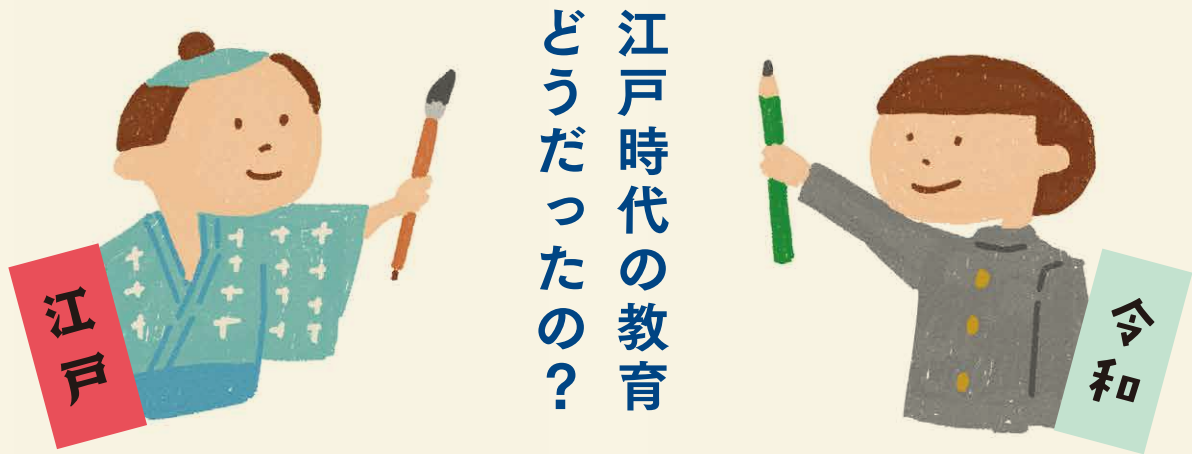
08 歴史を学ぶことで身に付く能力



歴史はひとつの思考方法といえます。ものごとを「今、ここ」だけでなく、変化や連続の過程の視点から捉えます。プロセスの学ともいわれ、過去の知識を得るだけでなく、筋道を立てて現在を理解する力を養います。すぐ役立つ力はやりですが、それとは少し距離をおき、現在の定番や常識を問うことで、じっくり考える力が身に付くでしょう。

研究室からの風景

SCENERY FROM THE LABORATORY



寺子屋

寺子屋は読み書きそろばんを学ぶ場として知られます。民間に発達した個人の塾です。「寺」だけでなく、町や村のお宅でも開かれました。津島キャンパス周辺(津島村)にも3つの寺子屋があったようです。

場所

学校

学校は塙に囲まれ、門があり、校舎は形や色も共通性が高いです。学区があり、みんながそれぞれ通える範囲に学校は設置されています。明治時代の学校は住民約600人に1校の構想でスタートしました。

師匠

「師匠」に近い存在です。学芸や人格に優れ、その先生に学びたいと思う者が通いました。先生が亡くなると、教え子は共同でお墓を建てる習慣がありました。幕府や藩による免許はありません。

指導者

教師

制度としての学校があり、教師がいます。教師は大学で教職課程を修め、免許をもっています。大学院出身の教師も増えています。教師は社会で専門職と評価される存在です。

それぞれの進度

子供は先生から一人ひとり異なる手本をもらい、それを練習するのが基本でした。それぞれが違う進度で学ぶ個別学習です。そのため、一斉の朝の会・帰りの会、入学・卒業はありませんでした。

時間

一斉学習

入学・卒業があり、その間を区切る学年・学期があります。時間割があり、その時間で行動することにより、学校の活動は成立します。同じ時間の設定は一斉学習のための前提です。

個人の状況に合わせて

教科書を往来物といい、民間で編集・出版されました。読み書きを中心に学び、商人の子はそろばんも重視しました。身分・職業に応じた往来物があり、将来使う実用的知識を学びました。「女大学」という女性用往来物もありました。

内容

多様な進路に向けて

国の標準としての学習内容にもとづく教科書があり、みんなが全国で共通の内容を学ぶことができます。各教科を調和的に学ぶのが方針です。どの教科も全般的に学ぶことは、社会における多様な進路や状況に向かう基礎の形成となります。

どうして違う部分があるのだろうか？ あなたの意見を待ってます！

梶井 一暁

KAJII KAZUAKI

専門

教育学 教育史

研究キーワード 教育史 人間形成文化史 教員養成論

もっと知るには

